

どなたでもいつの会でも参加できます

二〇一四年三月の「森三郎の作品を読む会」では、
 「雁」 『赤い鳥』昭和7年10月号初出
 「榎の僧正」 『赤い鳥』昭和7年11月号初出
 「森三郎童話選集 夜長物語」所収
 「桐壺宰相」 『赤い鳥』昭和7年11月号初出
 を読みました

今回は久しぶりに、古典を題材にした作品を読みました。
 その中の二作品について報告します。

「雁（がん）」

これは、平安時代中期の女流歌人赤染衛門と文章博士大江匡衡の結婚にまつわるエピソードを、二羽の雁の目を通して語っている話です。当時大江匡衡はまだ検非違使の下役人でしたが、東三条の右大臣藤原兼家の夢解きをし、褒美として、兼家が関白になった折には文章博士に採り立ててもらおう約束をします。匡衡が占ったのは、この話の狂言回しになっている雁が、赤染衛門の放り投げたお皿の糊を頭にかぶって前が見えずに、兼家の屋敷の松の木にぶつかり、落ちてしまったというものです。それを匡衡は「雁に白い糊」で近々「関白」の位におつきになるということだと占ったのです。

会員の水野日出夫さんは、話の中の結婚や文章博士になった時期などは、史実とは違うと解説してくださいました。また、興味深かったのは「私が知っているのは、逢坂の関と雪で『関白』と占う話です。」という説明でした。調べてみると、匡衡と赤染衛門の曾孫の大江匡房が著した『江談抄』の巻一の三「大入道殿夢想の事」に「大入道殿納言為りし時、夢に合坂の関を過（よ）きるに、雪降り、関路ごとごとく白しと見しめ給ひて、大いに驚かしめて、・・・」と載っています。大入道殿とは兼家のことです。匡衡はこれを「合坂の関は関白の関の字なり。雪は白の字なり。必ず関白に到らしむべし。」

と占って、兼家を喜ばせています。（岩波書店『新日本古典文学大系32』）森三郎はこの話を元にしながら、雁の目を通して、人間の世の中を垣間見る話に作り変え、「どうせ人間なんてものは、こつけないものだ。あんなのが世の中というものさ。」と笑い飛ばしています。読み終わって、一同、ユーモアを感じる話だねと言いました。また、赤染衛門の人物描写は、以前に読んだ、小野道風を扱った「蛙」に出てくる従妹の「紅梅」とどこことなく似ているねという感想も出てきました。（「蛙」については通信第17号で報告しています。）

「榎の僧正」

これは『徒然草』の四十五段の、あだ名を苦にして大きな榎を切り、次には根を掘り捨てていく「榎の僧正」を元にした話です。森三郎の話を読んだから、もう一度『徒然草』を読み直してみると、元の話はこんなに短かったかと思うほどです。短いながら（短いからこそ）ユーモラスな話です。この『徒然草』の三段仕立ての話を受けて、森三郎作品では、『赤い鳥』読者に近い年齢の十五歳の稚児に人々の気持ちを代弁させています。どのようにも想像を掻き立てるこういうユーモアいっぱい話が三郎さんは好きだったのではないのでしょうか。

◎ 次回予定 5月9日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和7年12月号初出作品

「タニシ太郎」・「お染」（森三郎童話選集 かささぎ物語）所収

◎ 第2回「森三郎に親しむ集い」のご案内

日時 5月25日（日）午後一時～四時（開場 十二時半）

会場 刈谷市社会教育センター ホール

（刈谷市民交流センター 4階）

♪ 楽しいプログラムを用意しています。

♪ 遊びにきてくださいね。♪

◎ 「森三郎の作品を読む会」の会誌「かささぎ」創刊号ができました。「森三郎刈谷市民の会」会員の皆さまには、「森三郎に親しむ集い」当日お渡しします。〈会員随時募集中〉